

仙林寺だより

NO. 73
編集・発行
松田正貴

行事報告

裕好さん帰山

八月八日、永平寺別院での一年間の修行を終え無事戻って参りました。当日は朝からあいにくの大雨しかも雷鳴が轟く中、龍門（ ）の古事さながら竜となった魚のご帰還にふさわしいと思いきやお天気までも歓迎ムードに一転です。まずはご本尊さまにお拝のご挨拶を済ませ、師僧に帰山



のご報告、午後からは早速作務（草引き）に励む裕好さん、モード切替の素早さは五十八歳という年齢を感じさせません。夜は家族のみのさやかな祝膳、修行の地での思い出話を聞きながら楽しいひと時を過ごしました。これからしばらくは、また以前のようなお寺での生活が始まります。法要や行事を通じて檀家の皆様、地域の方々とお会いする機会も多々あるうかと思えますが、仙林寺三人目のお坊さんとして宜しくお付き合い願います。

龍門：海中に龍門というところがあって、そこを通ると魚が皆龍になる話に例え。優れた師家（先生）の居る叢林（修行道場）に入れば、皆立派な僧侶になると言う故事。

寺子屋く流しそうめん&カキ氷

十二日、お盆突入直前しかも日曜日という好条件での開催です。「OB大歓迎、カキ氷もあるかもよ？」の誘い文句が功を奏したのか、前回の落ち着いた雰囲気など蹴散らされ、二十名を超える賑やかさに境内を訪れる参拝者も遠慮気味のお参りです。流しそ



うめんの仕掛けは、塩ビの桶などではありません。本物の竹を切り節を抜いた手作りで、

流すルートも会館前から本堂正面に格上げです。参加人数を少なめに見ていた主催者の詰めの甘さは毎度の事、協力員お二人は振り回されっぱなしの大忙しです。寺子屋初お目見えのカキ氷は、やはり子供に大人気、業務用のマシーンは疲れ知らず。ご相伴を決め込む参拝者の出現にもその供給ペースが落ちる事はありません。また力強い味方はカキ氷機だけではなく、第三の僧？裕好さんは即戦力。昨年の竹とんぼ作りで発揮した手先の器用さは健在、ただ依頼者の要望とは微妙に変化をつける“もの作り気質”は職人というより芸術家タイプなのでしょう。次回十月の寺子屋で見せる裏技が今から楽しみみです。

仙林寺のお盆

十三日の迎え盆、恒例「施食会（せじきえ）」が修行されました。世話人の皆様はじめ参拝の方々が多数訪れ、賑やかな法会となりました。ただ、暑さのせいにするわけにはいきません

が、お札の誤配でご迷惑をおかけました。お詫び申し上げます。十四、十五日は新盆の精霊をご供養に伺う「棚経」です。住職は遠方のお檀家担当、副住職は町内をスクーターで、裕好さんは四輪駆動車を駆って郊外へと、「師走（ ）って本当は八月じゃないの？」と勘違いしそうな二日間でした。また、お盆期間中の境内の様子はと言いますと、さしずめ「仙林寺銀座」十二日が日曜日と言う事もあり、混雑も人も一日分前倒しの様相でした。観音堂では、季節限定「きまぐれ茶屋」がオープンするも、困炉裏の風情は酷暑にそぐわず茶所は縁側へと移動です。無人・麦茶・紙コップ？がよろしいようで・・・。

師走：師の僧がお経をあげる為に馳せ回る頃「師馳す」との説あり。

【施食会でのお話】

本日はお盆の入りです。この“お盆”とは古いインドの言葉でウランバーナを中国で漢字にあて孟蘭盆、お盆としたと聞いております。また、この言葉には逆さ吊りという意味があると言いますが、逆しまな見方、見解とも考えられそうです。仏教で言う誤った見方とは勿論、お釈迦さまの教えを自分勝手に自分の良い様に解釈するという事です。孟蘭盆経というお経にあるお話ですが、お釈迦さまの有名なお弟子様に目蓮尊者が居られます。そのお母さんが死後に餓鬼道に落ちて苦しみます。目蓮さんが亡き母に水や食べ物をお供えするとそれが火になって食べる事ができないのです。このお話も、目連さんが幼い頃、母親がわが子可愛さのあまり、周りの飢えた子供たちへの施しを怠った母の行いに由来するものです。まさに逆しまな考えによる報いとも言うべきお話ではないでしょうか。八月十五日、あらゆる命のご縁に食べ物や飲み物を布施するご供養をすることで、母も目連さんも救われた古事があります。本日

の施食会（せじきえ）はこのような謂れを踏まえた大切な行事です。食育の大切さが叫ばれる時代です。食べ物が此処にいたる成り立ちや食べ方を学ぶ大切さは勿論ですが、今ある私の命が多くの生き物の命を頂いた上で成り立っていること、呼吸や水を飲む事でさえ他の命を犠牲にしなければこの命を保つ事ができません。そのように考えるとき、私だけの命なんだというふうなおこった考えは持てないものと思います。「先祖の血みんな集めて子が生まれ」という川柳がありました、過去の多くの命に供養する事で、感謝の気持ちを持ち直すものと思えます。感謝の気持ちを持つことで今のこの時を生きる生き方が如何にあるべきかを学べるものと思えます。そのようなお気持ちで本日のご法要にお臨み頂ければ、それはもう計り知れない功德が頂けるものと存じます。

如意輪観音祭礼

九日、餅観音の愛称で知られる夏の祭礼がありました。

村岡・八幡台楊柳観音祭礼

十五日、両字地区の祭礼です。見るも涼しげな柳が植樹され、新たな趣が加わりました。公園化の計画もあるとのこと、早期の整備が望まれます。

ひつじつ 「観音さまとおかげさま」

先日、子供さんの坐禅の指導をする機会がありました。坐禅も一通り終わり、「何か質問は」との問いかけに次のような質問がありました。「仏様に物をあげても食べてもくれないし、有難うも言ってくれない。一体何のためにあげるのでしょうか」。私は普段の生活の中で「最近如何ですか」と言えば「お陰さまで」と挨拶してあります。このおかげさまという言葉は、上のおと下のさまは「お釈迦さま」というのと同じ敬語で、かげというのは見えない存在、

陰、つまり御霊など計り知れない縁を言うものと思えます。また最近ではあまり見られなくなりましたが、以前は「陰膳」という習慣がありました。家族が旅に出たときに、旅先でひもじい思いをしないように、その人が家に居るときと同じようにお膳を供えました。昔の人は、このように見えない存在のみならず、生きている人に対しても同じ心をお供えたものでした。ところで観音さまはお釈迦さまとは違いお観音さまとはあまり言いません。敬語が一つ取れた事で私たちにより身近な仏さまとも言えそうです。遠く手の届かないところではなくすぐ近くに居てください。もつと言え、皆様のお隣に居る方、前に坐っている方が本当はみんな観音さまというのが正解なのだと思います。教師と反面教師という言い方をしますが、お寺に居られる木や石でできた観音さまは、教師として理想のお姿を現したものと思えます。さて、見える仏さまのお話はこれくらいにしまして、先の子供さんの質問に対する答えですが、仏教詩人 相田みつをさんの詩にこのようにあります。

花をささえる枝

枝をささえる幹

幹をささえる根

根は（ ）だなあ。

大事なものは見えたり見えなかつたりするんです。見えないうところに注ぐ愛情が見える姿をより美しくしてくれるのかもしれない。

もうひつじつ 「仏さまはどこに？」

十三日の迎え盆で懐かしいご自宅にお戻りのご先祖さまも、十六日の送り盆にはナスの牛にお土産を沢山載せてお帰りになる

と言われております。ところで、人は亡くなると天に昇ってお星様になる。お星様になつて残る家族を見守っているんだなどと言われることもあります。ですが、今年あたりからは「風になる」と考える方が多くなつたようです。元々日本人の多くは「土に帰る」という言葉からも想像できるように、大自然に帰ってゆくという考えが根底にありますから、星でも風でも水であつても差し支えないものと思えます。

それから、仏教的に正しいの？などと言われると困りますが、「お墓」という字はクサカナムリだから、土饅頭の上に墓印として南天などの植物を植えた。すると死んだ人のみ魂が夜露になつて木の葉っぱから昇ってくる。」等という話もあります。「千の風」ブームで、「私のお墓の前で泣かないでください。そこに私はいません」という歌詞が話題になつています。詠み人知らずとされたこの詩も、最近の調査では、遠くはなれている事で親の死に目に会えなかつたという事実があり、その現実に苦しむ友人に捧げられたものだったとその詩ができる背景が明らかになつたそうです。ご先祖さまは、お墓だけではなく何処にでも居てくださる。大自然という私達の身近なお姿になつて何時までも見守り続けて下さっている。お盆の時期にはそのご先祖さまを特別にご家庭にお招きして、懐かしい時間を一緒に過ごす事ができる。と考えれば如何でしょうか。その様に考えれば、お盆供養の意味も改めて有難く感じる事ができますし、また大自然に対しても優しい気持ちで接する事ができるのではないのでしょうか。